

プレスリリース

2019年10月19日

2020年4月11日（土）OPEN

弘前れんが倉庫美術館

（青森県弘前市 吉野町）

ー 施設概要・開館記念プログラム紹介 ー

弘前れんが倉庫美術館 開館準備室（弘前芸術創造株式会社）

広報担当: 大澤、鎌倉

TEL: 0172-32-8950 FAX: 03-6369-3596 E-mail: press@hirosaki-moca.jp

〒036-8182 青森県弘前市大字土手町87（旧一戸時計店）

※本発表内容は施設の指定管理者選定後に変更となる可能性があります。

目次

p. 2 美術館について

- ・弘前れんが倉庫美術館とは
- ・館名について
- ・ミッション
- ・美術館の特徴

p. 4 プログラム

- ・プログラムについて
- ・弘前エクステンジ
- ・2020年 開館記念 春夏プログラム「Thank You Memory – 醸造から創造へ – (仮)」
- ・2020年 開館記念 秋冬プログラム「小沢剛『帰って来た』シリーズ オールリターンズ (仮)」

p. 10 建築 - 施設の建築改修プラン -

- ・コンセプト
- ・建築の特徴
- ・「シードル・ゴールド」の屋根

p. 12 ロゴ

- ・コンセプト

p. 13 施設概要

- ・平面図 1階/2階
- ・パブリック・スペースとギャラリー・スペース
- ・基本情報

美術館について

弘前れんが倉庫美術館とは

弘前れんが倉庫美術館は、明治・大正期に建設され、近代産業遺産として弘前の風景を形作ってきた吉野町煉瓦倉庫を、建築家の田根剛が改修し、2020年4月11日に美術館として再生される新しい文化施設です。築100年におよぶ煉瓦の建造物の耐震性能を高めつつ、残せるものは可能な限り残し「記憶の継承」と「風景の再生」をコンセプトにもつ建築空間では、その魅力を最大限に生かした国内外の先進的なアートを紹介するとともに、弘前そして東北地域の歴史、文化と向き合う同時代の作品を収集し、展示します。また、施設にはスタジオ等も備え、地域の人々が集い、創造するコミュニティの場としても機能します。現代アートを通して、地域と世界を結び、多様なヴィジョンと豊かな感性に触れ、過去から現在、そして未来へと繋がる新たな創造性を喚起するクリエイティブ・ハブ（文化創造の拠点）を目指します。

館名について

「吉井酒造煉瓦倉庫」そして「吉野町煉瓦倉庫」として地域のなかで呼び親しまれてきた場所の記憶と歴史を、建築とともに未来へ継承したいという想いのもと「弘前れんが倉庫美術館」と名付けられました。また同時代の文化芸術のための美術館であることを世界に発信するため、英語表記を「Hirosaki Museum of Contemporary Art」としました。

ミッション

弘前れんが倉庫美術館は、地域のクリエイティブ・ハブ（文化創造の拠点）となるために、活動の基盤として3つのミッション（使命）を設定します。

1. 建築の記憶の継承と、新たな空間体験の創出

- ・ 近代産業遺産である煉瓦倉庫の記憶を、未来へ継承します。
- ・ 建築と共振し人々の創造性を喚起する作品を通じて、新たな空間体験を創出します。

2. 地域の新たな可能性の開発と歴史の再生

- ・ 弘前および東北地域との対話を促し、その自然、文化、歴史を新たな視点から再生します。

3. 異なる価値観の共有と開かれた感性の育成

- ・ 先鋭的な技術や手法を用いた多様な表現活動を紹介します。
- ・ 異なる文化や世界との出会いや交流を生み出し、人々の開かれた感性を育みます。

美術館の特徴

新しい美術館として展覧会プログラムの企画や、作品收藏などの諸活動において、次の2つの特徴を生かします。

サイト・スペシフィック（場所性）

ー「創ること」「見せること」「收藏して歴史に残すこと」

建築や地域に合わせたコミッション・ワーク（新たな作品制作）を重視し、完成した作品を展示し、さらに收藏するという一連の流れによって、弘前ならではのコレクションを形成します。

タイム・スペシフィック（時間性）

ー 異なる展示のリズムと柔軟な空間の使い方

従来の美術館がもつ常設展示室、企画展示室という固定的な運用にこだわらず、煉瓦倉庫の可能性を最大限に生かした自由で柔軟な方法で空間を運用し、年間プログラムを構成します。また展示される個々の作品も、短期から長期まで、異なるリズムで展示します。

プログラム

プログラムについて

年間プログラムは3つのシーズンで構成されます。春夏、秋冬の2シーズンは美術館企画を開催し、冬シーズンは映画上映やパフォーマンス等の特別イベントのほか、市民の様々な活動にも使用されます。

1. 春夏シーズン（美術館企画）
2. 秋冬シーズン（美術館企画）
3. 冬シーズン（市民などの施設利用や特別企画など）

春夏、秋冬の各シーズンは、グループ展あるいは大型の個展を中心に「弘前エクスチェンジ」の各種プロジェクトと共に構成されます。

弘前エクスチェンジ

本プロジェクトでは、主に以下の内容を予定しています。

- ・ 弘前出身や縁のあるアーティスト、地域の歴史や伝統文化に新たな息吹を吹き込むアーティストらを招聘し、滞在制作や調査研究、地域コミュニティとの関係性を通して行う様々なプロジェクト。
- ・ 美術館の活動から派生する人々の幅広い関心や、クリエイターたちの多様な表現に継続的に応答する取り組みとして、トークやレクチャー、ワークショップといった各種パブリック・プログラム。

「エクスチェンジ」（交換）という名前に込められたように、本プロジェクトはローカルとグローバル、作り手と地域の人々そして鑑賞者といった異なる視点が交差し、ふれあい、交換される場を生み出すことで、新たなアプローチにより地域の創造的魅力的再発見へ繋げることを目指します。

第1回「弘前エクスチェンジ」には、弘前ゆかりのアーティスト潘逸舟（HAN Ishu）を招聘します。高校卒業までを弘前で過ごした潘が、弘前で発表した最初の作品およびその後の代表作の展示や滞在制作等を予定しています。 ※潘逸舟プロフィール →8ページ

2020年 開館記念 春夏プログラム

Thank You Memory – 醸造から創造へ – (仮)

会期：2020年4月11日（土） - 8月31日（月）

イン・シウジェン、ジャン＝ミシェル・オトニエル、笹本晃、畠山直哉、藤井光、奈良美智、ナウイン・ラワンチャイクン、潘逸舟 [弘前エクスチェンジ]

美術館（ミュージアム）の語源は、古代ギリシャ神話に登場する記憶の女神の娘である学問・芸術の女神たちの祀った神殿の名前に由来します。つまり、記憶と芸術は不可分であり、美術館は過去、現在、そして未来へ繋がる「記憶」をめぐる装置とも捉えられるでしょう。

開館記念プログラムは、この場所と建物の「記憶」に焦点をあて、8名の現代アーティストたちによる独創的な視点で再生するとともに、煉瓦倉庫のダイナミックな空間をお披露目します。展示は改修工事の記録に基づく作品や、土地の人々の協力のもと制作された作品など、この場所ならではのサイト・スペシフィックな新作を中心に構成されます。また、煉瓦倉庫が美術館となるきっかけの一つである「YOSHITOMO NARA + graf A to Z」展（2006年）を記念して制作された奈良美智《A to Z Memorial Dog》も改めて展示されます。

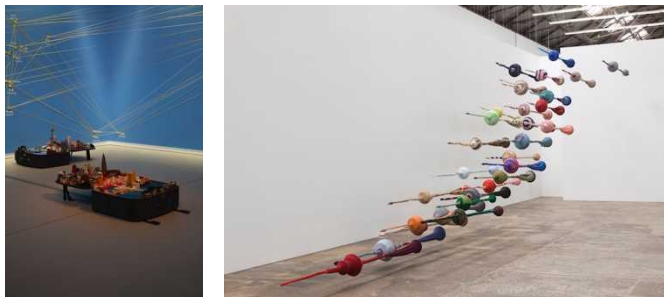
本展によって、場所の記憶が未来へ継承されること、そして記憶を巡る装置が起動し広くアーティストや市民が集まることで、未来の記憶がつくられていくことを願います。

【作家紹介】

尹秀珍（イン・シウジェン） / YIN Xiuzhen

1963年、中国 / 北京生まれ、同地在住。

古着や中古品などを使い、近代化や都市化のなかで消滅していく個人的な記憶をすくいあげるような立体作品を制作している。2010年には、ニューヨークMoMAにて中国人女性作家として初の個展を開催した。弘前の市民から古着を提供してもらい制作するプロジェクトなどを構想中。



左：《Portable City series》 2001年- / 右：《Weapon》 2003-2007年
©Yin Xiuzhen

ジャン＝ミシェル・オトニエル / Jean-Michel OTHONIEL

1964年、フランス / サン＝テティエンヌ生まれ、パリ在住。

90年代初頭より変容、昇華、変異などの現象に関心を寄せながら、可逆性の素材を用いた作品を制作している。ムラーノガラス等を用いた展示環境と調和する数々の大型彫刻作品で世界的に知られる。りんごにインスピレーションを受けた彫刻作品などを検討している。

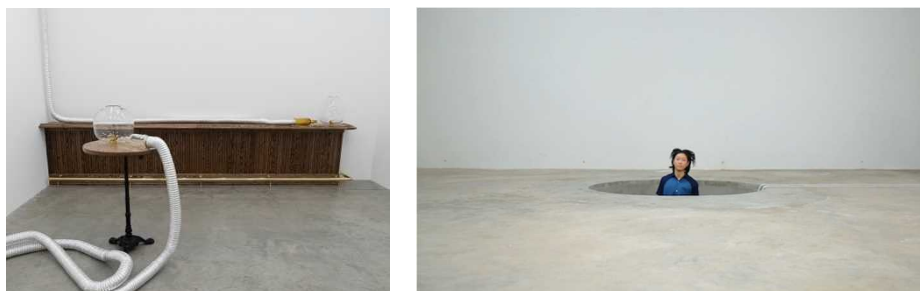


左・中央：《Grand Pivoine》（部分）2015年 Photo: Claire Dorn
右：《Les Belles Danses (The Beautiful Dances)》2015年 Photo: Thomas Garnier

笹本晃 / SASAMOTO Aki

1980年、神奈川県横浜市生まれ、ニューヨーク在住。

空間を彫刻的に分節し、その環境の中で自らの身体によるダンスや、言葉、モノを用いた即興的なパフォーマンスを行う作品を中心に、彫刻やインスタレーションを発表している。煉瓦倉庫に残された古い建具や資材を組み合わせたインスタレーションと、空間を生かしたパフォーマンスを展開予定。

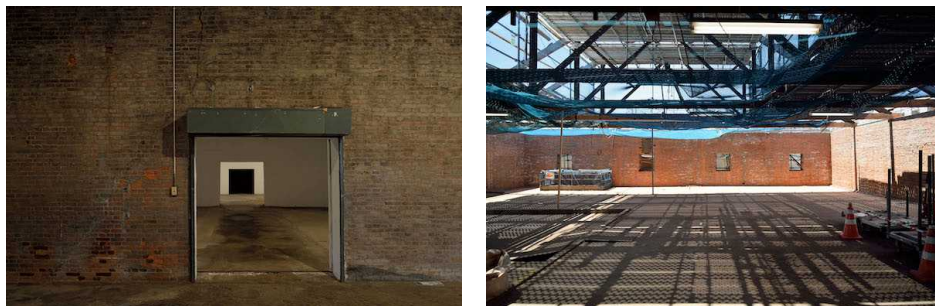


左：展示風景：「Past in a future tense」 Bortolami（ニューヨーク） 2019年
Photo by John Berens ©Aki Sasamoto, courtesy of Bortolami, New York, and Take Ninagawa, Tokyo.
右：《random memo random》2016年 ©Aki Sasamoto, courtesy of Take Ninagawa, Tokyo

｜ 島山直哉 / HATAKEYAMA Naoya

1958年、岩手県陸前高田市生まれ、東京都在住。

写真家。デビュー時から一貫して、自然・都市・写真術という三つの関係性に主眼を置いた作品を制作している。深い思考とリサーチのもとに撮影される静謐な作品は、文学や思想など言語表現に共通するものを感じさせる。煉瓦倉庫の改修工事の過程に注目した展示を構想中。



吉野町煉瓦倉庫の改修風景、2017年- ©Naoya Hatakeyama

｜ 藤井光 / FUJII Hikaru

1976年、東京都生まれ、東京都在住。

歴史的事象を題材に、社会の不可視な領域を構造的に批評する作品を、主に映像インスタレーションとして発表している。寡黙な事物たちに語り出させるその映像手腕は世界的に高く評価されている。煉瓦倉庫の改修過程を記録した映像インスタレーションを発表予定。



《エストニア国立博物館》2018年 ©Hikaru Fujii

｜ 奈良美智 / NARA Yoshitomo

1959年、青森県弘前市生まれ。

1990年代半以降からヨーロッパ、アメリカ、日本、そしてアジアの各地で規模に関わらず様々な場所で展示発表を続ける。見つめ返すような印象的な絵画、日々自由に描き続けるドローイング作品のほか、木、FRP、陶、ブロンズ、そしてインスタレーションなど多様な素材や空間に生命を吹き込む様な彫刻作品を制作。近年取り組んでいる、制作の日々や旅先での出会いを収めた写真作品の発表を予定している。



左：《A to Z Memorial Dog》2007年 ©Yoshitomo Nara 撮影：長谷川正之 / 右：《SAKHALIN》2014年 ©Yoshitomo Nara, 2014

| ナウィン・ラワンチャイクン / Navin RAWANCHAIKUL

1971年、タイ / チェンマイ生まれ、チェンマイおよび福岡県在住。

インド系タイ人という自身のアイデンティティの問題から、コミュニティに根ざしたプロジェクトや作品制作を行う。

人々との交流から生きる喜びを導き出し、コミュニティに内在する多様性を絵画や映像で表現する。弘前市民へのインタビューを元に制作する大型の絵画と映像を検討している。

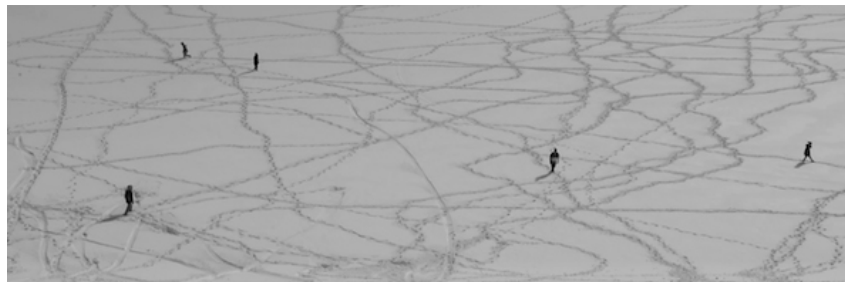


左：《OK Nakhon》2016年 / 右：弘前のためのスケッチ、2019年
Courtesy of the artist and Navin Production

| 潘逸舟 / HAN Ishu 第1回「弘前エクステンジ」作家

1987年、中国 / 上海生まれ、東京都在住。

社会と個の関係の中で生じる疑問や戸惑いを、自らの身体や身の回りの日用品を用いて、映像、インスタレーション、写真、絵画など様々なメディアを駆使しながら、真摯に、時にユーモアを交えながら表現する。高校卒業まで弘前で過ごした潘が弘前で発表した最初の作品およびその後の代表作の展示や滞在制作等を予定。



左：《マイ・スター》2005年 / 右：無題 2016年
©Han Ishu Courtesy of ANOMALY

2020年 開館記念 秋冬プログラム

小沢剛「帰って来た」シリーズ オールリターンズ（仮）

会期：2020年9月19日（土） - 2021年1月11日（月）

風景の中に自作の地蔵を建立し写真に収める《地蔵建立》や、日本美術史の名作を醤油でリメイクした《醤油画資料館》など数々のシリーズ作品を発表し、世界的に活躍する現代アーティストの小沢剛。近年、グローバルに活躍した歴史上の人物を題材に、事実とフィクションを重ね合わせ物語を構築する「帰って来た」シリーズに取り組んでいます。本展は弘前ゆかりの近現代の人物を題材とした「帰って来た」シリーズの新作とこれまでの同シリーズ作品で構成するほか、ワークショップなどの開催を予定しており、近現代における弘前・東北、アジア、グローバルとローカルを巡る様々な問いを誘発します。

「帰って来た」シリーズとは

小沢剛が2013年から発表しているシリーズ作品です。グローバルに活躍した近現代の人物を題材に事実とフィクションを交え、絵画、映像、音楽で構成される劇場型のインスタレーション作品。これまでに野口英世、藤田嗣治、岡倉天心などを題材に、ガーナ、インドネシア、インドなど世界各地の現地アーティストとの共同で制作されてきました。弘前で発表予定の新作は、本シリーズの5作品目となります。

【作家紹介】

小沢剛 / OZAWA Tsuyoshi

1965年、東京都生まれ、埼玉県在住。

ユーモアを交えながら歴史や社会を鋭く批評する作品を絵画、写真、映像、インスタレーション、ワークショップ等、多様な手法で制作し、国内外で高い評価を得ている。第69回芸術選奨文部科学大臣賞受賞（2019年）。



左：《帰って来たペインターF》（部分）2015年 写真：椎木静寧 / 右：《ベジタブル・ウェポン—縄文鍋鍋/青森》2007年
©Tsuyoshi Ozawa

建築 - 施設の建築改修プラン -

コンセプト

吉野町煉瓦倉庫は明治・大正期に建設され、日本で初めて大々的にシードルを生産した場所として、弘前の風景をつくり続けてきました。国内ではこの様な近代産業遺産を壊し、世代から世代へと受け継がれた土地の記憶を失い続けていく中で、弘前市は吉野町煉瓦倉庫を「世界のアート」が体験できる美術館にすることを決定しました。

我々はこの未来への意志を受け継ぎ、耐震補強や様々な制度による制約がある中で「記憶の継承」をコンセプトにした建築を提案しました。老朽化や経年によって傷んだ外壁を修復し、分厚い漆喰で覆われた内壁を剥がして煉瓦に戻し、床を「赤煉瓦」で覆うことで、建物一体を煉瓦で繋ぐ試みを行っています。煉瓦倉庫の記憶を継承し、いまあるものを未来の時間へと引き延ばすような建築によって、この弘前でしか体験することのない世界でたったひとつの美術館になればと思っています。（建築家 田根剛）

建築の特徴

- ◎ 近代産業遺産である煉瓦倉庫を活用し、次の時代の使い方へと継承する
- ◎ 「シードル・ゴールド」のチタン製の屋根が新たな美術館のイメージをつくる
- ◎ 「ミュージアム・ロード」がアートと市民を繋ぐパブリック・スペースとなる
- ◎ 「サイト・スペシフィック」と「タイム・スペシフィック」な展示空間
- ◎ 「P C 鋼棒」による高度な耐震補強により、既存の煉瓦壁を内外無傷で保存する設計
- ◎ 元々あった漆喰を「剥がし」煉瓦を露わにし、そのまま「残す」ことによって、場所の質を活かす
- ◎ C棟がシードル・カフェとなり市民に開かれた場所となる

「シードル・ゴールド」の屋根

かつてこの場所は、日本で初めて大々的にシードルを製造した工場でした。その歴史を象徴するのが「シードル・ゴールド」の屋根です。素材に用いられたのは、寒冷地においても耐久性と耐食性を備えるチタン材。陽極酸化法により加工された皮膜表面が、光の角度によって発色します。

「朝には白金のように、正午には黄金に輝き、夕陽を受けて赤金のシードル色に深く染まっていく。北国における爽快な夏の青空の景色や、雪原の広がる冬の風景の中で、吉野町緑地帯の歴史を支え続けた煉瓦倉庫の建築と、刻々と移り変わるシードル・ゴールドの屋根が風景に彩りを与えることで、弘前れんが倉庫美術館が未来の記憶へと繋がることを期待している」との田根氏の想いが込められています。



上空からみたシードル・ゴールドの屋根
©Atelier Tsuyoshi Tane Architects



田根剛 [建築家]

1979年東京生まれ。Atelier Tsuyoshi Tane Architectsを設立、フランス・パリを拠点に活動。2006年にエストニア国立博物館の国際設計競技に優勝し、10年の歳月をかけて2016年秋に開館。また2012年の新国立競技場基本構想国際デザイン競技では「古墳スタジアム」がファイナリストに選ばれるなど国際的な注目を集める。場所の記憶から建築をつくる

「Archaeology of the Future」をコンセプトに、現在ヨーロッパと日本を中心に世界各地で多数のプロジェクトが進行中。主な作品に「エストニア国立博物館」（2016年）、「Todoroki House in Valley」（2018年）、「とらやパリ店」（2015年）、「LIGHT is TIME」（2014年）など。フランス文化庁新進建築家賞、フランス国外建築賞グランプリ、ミース・ファン・デル・ローエ欧州賞2017ノミネート、第67回芸術選奨文部科学大臣新人賞、アーキテクト・オブ・ザ・イヤー2019など多数受賞。2012年よりコロンビア大学GSAPPで教鞭をとる。

ロゴ

弘前れんが倉庫美術館

HIROSAKI
MUSEUM OF CONTEMPORARY
ART

コンセプト

美術館のロゴはグラフィック・デザイナー服部一成氏が手がけました。

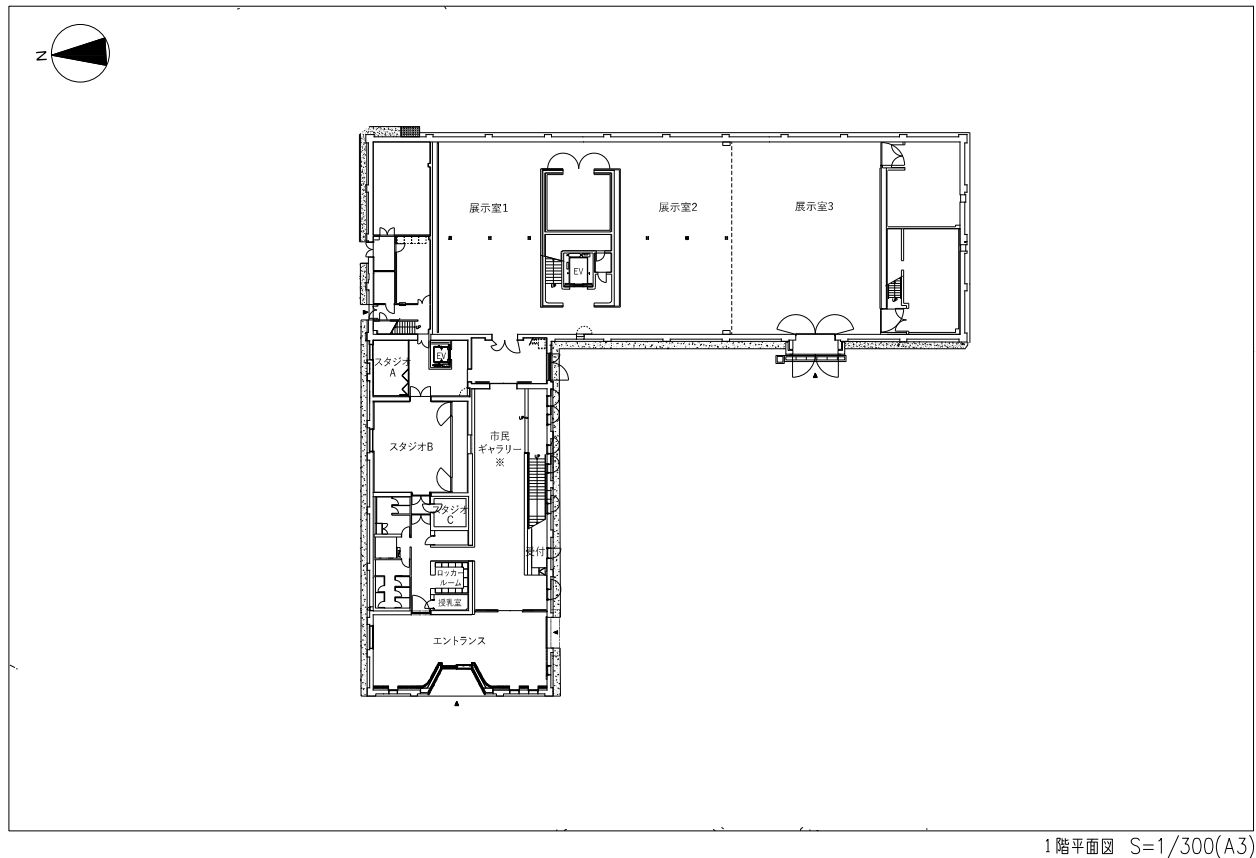
館名の上に乗る弘前の「H」が、文字列の長さに合わせて変化する有機的なデザインが特徴です。また伸縮する「H」の形は、人々の記憶を宿した煉瓦倉庫が美術館に生まれ変わる、その過去から未来へ続いていく時間軸を表しています。上下に移動しながら流れていく文字は、美術館の中を巡り、作品との出会いから生まれる心の動きをイメージしています。

服部一成 [グラフィックデザイナー]

1964 年生まれ。ライトパブリシティを経てフリーランス。主な仕事に「キューピーハーフ」の広告、雑誌『流行通信』『here and there』『真夜中』のアートディレクション、三菱一号館美術館や新潟市美術館の VI 計画、ロックバンド「くるり」のアートワークなどがある。毎日デザイン賞、亀倉雄策賞、ADC 賞、東京 TDC グランプリなどを受賞。

施設概要

1 階平面図



1階平面図 S=1/300(A3)

- ・展示室 1 : 249㎡
- ・展示室 2 : 209㎡
- ・展示室 3 : 294㎡

- ・受付／市民ギャラリー : 165㎡

約15mの展示用壁面を備えており、企画展示や市民による展示等も行える空間

※展示に使用できる場所は、美術館の特徴である「タイム・スペシフィック」の考え方にに基づき、時期により館内の他の場所となる場合があります。

- ・スタジオ A : 22㎡

3DプリンターやPCを備えたワークショップやクリエイティブな制作活動に特化したスタジオ

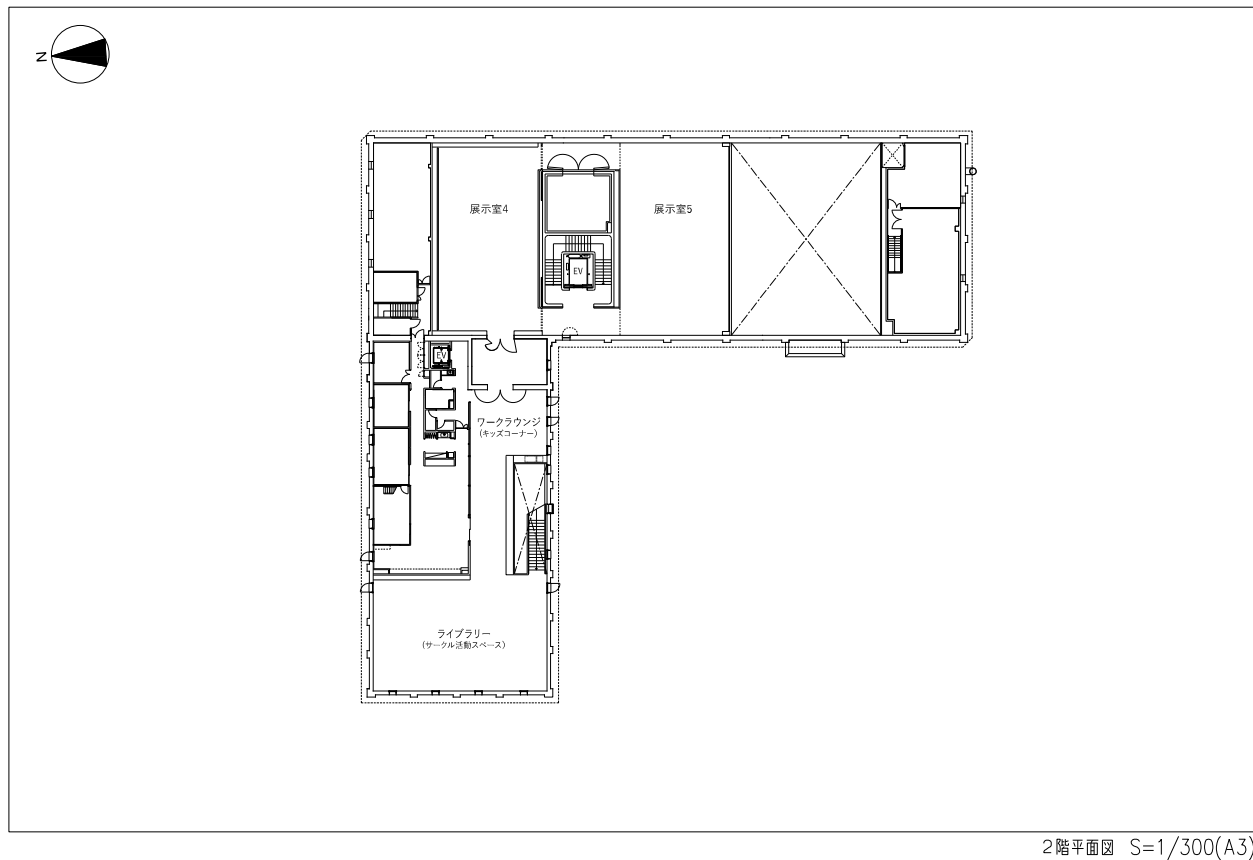
- ・スタジオ B : 71㎡

スクリーン、プロジェクター、大型ミラーを備えており、映画・映像の上映やダンスレッスン等に適したスタジオ

- ・スタジオ C : 12㎡

アンプ、スピーカー、ドラムセット、ミキサーを備えており、楽器練習や演奏に適したスタジオ

2階平面図



- ・ 展示室 4 : 249㎡
- ・ 展示室 5 : 227㎡
- ・ ライブラリー／ワークラウンジ／サークル活動スペース／キッズコーナー : 300㎡
(ライブラリー席数 : 36席程度)

パブリック・スペースとギャラリー・スペース

無料で入場できるエリアには市民のための貸しスタジオ（有料）、ライブラリー等があり、所蔵作品の一部も展示されます。有料の展示室エリアは、1階面積が752㎡、2階面積が476㎡。大きな吹き抜け空間とコーラタールで塗られた黒い壁面が特徴です。展示室とともにスタジオやライブラリー等の機能を併設することで、市民の創造性を喚起し、弘前の新しい文化創造の拠点として機能します。

基本情報

住 所： 〒036－8188 青森県弘前市吉野町2番地1

開館時間： 9：00-17：00
但し、金曜日・土曜日に限りスタジオ、ライブラリーのみ21：00まで開館

休 館 日： 火曜日（祝日の場合は翌日に振替）、年末年始
但し、弘前さくらまつり及び弘前ねぶたまつりの期間中は全日開館

アクセス： JR 弘前駅より

- 徒歩 約20分
- タクシー 約7分
- 弘南バス「中土手町」下車 徒歩 約4分、「住吉入口」下車 徒歩 約2分

弘南鉄道大鰐線 中央弘前駅より

- 徒歩 約3分

ウェブサイト： <http://www.hirosaki-moca.jp>

Instagram： @hirosaki_moca

Facebook： @hirosaki.moca

Twitter： @hirosaki_moca